

ひなぎくの森

第9話
文*sawori

「小桃さん、見えました～」ひなぎくがドリンクを運びながら、街角ブックの小桃さんを連れてきた。

「小桃さん！ここ、ここどうぞ、席！」松山店長が席をずれて隣にスペースを空けた。

「あからさまな誘導だな」椿がフランソワにつぶやく。

「あ、あのレディーが例のデイジーの花束の・・・」

「あ、そか、今年も贈ってた？松山さん。切ないよな～ユー・ガット・メール！早くトム・ハンクスになれるといいけどね～」

「でも、そうしたらひなぎくが失恋してしまいます。」

「まあ、ひなさん松山さんのこと好きっばいからね。」

そんな二人に気づいたひなぎく。

「すごいね！もう仲良くなってる。店長ともすぐに意気投合してたし、フランソワってコミュニケーション高いよね。」

「ひどい、ひなさん。オレがコミュニケーション高いのかもしないじゃん。」

「いや、椿くんは普段無愛想じゃん、バイトでも。だから笑顔で喋っててびっくり。」

あ、そっかーという顔で椿がフランソワの顔を見る。

「うーん、確かにね、なんかフランソワ喋りやすいんだよな、懐が深そうというか、ひなさんが言ってたアンソニーっばいってわかる気がするかも。」

「アンソニー？」フランソワが首を傾げる。

「でしょ！？キャンディ・キャンディのアンソニー！小さい頃おばあちゃんちで読んで憧れてたな。丘の上の王子様！」

「oh, ひなぎくのアコガレ？丘の上の王子様？」

フランソワ、喜ぶ。

「あ、でもあれでしょ、ひなさんもうアルバートさん派なんですよ？」

「アルバート？」

「そうなんだよねー、大人になってくると？アルバートさん（ウィリアム大おじさま）の、影で見守る大人で余裕な感じに魅力を感じるんだよね。」

フランソワ、項垂れる。

「さしずめ、松山さんがアルバートさんなんかなー・・・」

フランソワに聞こえないように、椿が小声で呟いた。

～つづく～

* ひなぎくの森のカルチャーその9

キャンディ・キャンディ



『キャンディ♡キャンディ』は、原作：水木杏子、作画：いがらしゆみこによる1975年発表の日本の少女漫画作品。孤児のキャンディが、不幸にあっても明るく元気に生きていく超大作。登場する男子全員がキャンディに恋をするという女子憧れのシチュエーション。魅力的な男子が多数登場するので、ダレ派かで盛り上がるができる。ちなみに私はひなぎくと同じ、アンソニーからのアルバートさん派です。



アンソニー
キャンディが小さい頃、孤児院のあるポニーの丘で泣いていた時に慰めてくれた通称「丘の上の王子様」にそっくりな少年。



アルバートさん=ウィリアム大おじさま
孤児だったキャンディを引き取り、正体を明かさず支え続けた真実の王子様。

ひなぎくにはちょっと古いんじゃないか？という「キャンディ♡キャンディ」は、ひなぎくの祖母富美枝所蔵の漫画です。富美枝さんは大の少女漫画好きです。椿はひなぎくから借りて読んだことがあります。詩の創作の為になんでも読んでいます。

(前回までのあらすじ) ライブハウスにて、フランソワはもう1人のエバグリのバイト、加瀬椿(バンド、トルーマンのギターボーカル)と出会う。イケメンにはうるさいフランソワも認めるイケメン登場に、フランソワ焦るかと思いきやひなぎくの可愛さについて意気投合する二人であった。

* sawori *